



メモリアルゾーンの金蓮花ー「困難に打ち克つ」

### 2022年度 学友会入部届 集計

	中1	中2	中3	中学合計	高1	高2	高3	高校合計	総部員数	中学部長/キャプテン	中学副部長/副キャプテン	中学マネージャー	高校部長/キャプテン	高校副部長/副キャプテン	高校マネージャー	
学芸部	英語部	1	0	2	3	0	2	3	5	8	(中高一緒に活動)			高3-4 村杉知駿		
	演劇部	2	2	0	4	3	0	2	5	9	中2-1 中原準斗			高3-3 猪股隆太郎		
	科学部	2	5	3	10	4	1	3	8	18	中3-3 千葉 颯			高3-3 鈴木海都		
	写真部	12	5	1	18	4	4	11	19	37	(中高一緒に活動)			高3-4 金子龍之介	高3-1 池上 創	
	吹奏楽部	16	13	8	37	7	10	13	30	67	中3-4 吉岡奏太郎	中3-2 高橋頼彬 中3-4 鷹巣 玲		高2-1 齋藤浩太	高2-3 木山豊盛 高2-3 田村航大	
	数理研究部	9	8	9	26	9	10	8	27	53	中3-2 久保 壮太郎 中3-2 佐々木 惇成			高3-4 田村 有且		高3-2 村上 継人 高3-3 小山 隼人 高3-4 石川 暢葵
	生物部	3	3	1	7	2	1	4	7	14	中3-4 齊藤友信			高3-4 佐藤竜誓	高3-4 寺崎圭人	高3-3 田尾優樹
	聖ポーロ会	0	0	0	0	2	2	2	6	6						
	地歴研究部	0	2	3	5	0	3	3	6	11	(中高一緒に活動)			高3-3 猪股隆太郎		
	鉄道研究部	2	4	3	9	1	3	3	7	16	(中高一緒に活動)			高3-2 中野遥葵	高3-1 本庄隆邦	高2-4 川澄優太
	天文部	3	1	1	5	0	0	1	1	6	(中高一緒に活動)			高3-3 雨澤凌太		
	美術部	8	3	4	15	11	6	4	21	36	(中高一緒に活動)			高3-4 林健太郎	高3-3 渡邊大地	
	文芸部	2	0	1	3	13	7	4	24	27	(中高一緒に活動)			高3-2 佐々木秀悟	高3-3 杉浦拓隼	高2-2 辻村幸多
	放送研究部	1	13	5	19	3	6	2	11	30	(中高一緒に活動)			高3-1 山下雄太郎	高3-4 伊東音弥	
	クワイアー	3	3	3	9	4	3	1	8	17	中3-4 名越 蒼		(中高一緒に活動)	高1-2 初田全彦		
	合計(A)	64	62	44	170	63	58	64	185	355						
	(アコライト)	0	0	(2)	0	2	2	4	8	8	(中高一緒に活動)			高3-4 後藤 稔		
運動部	剣道部	4	4	1	9	1	1	2	4	13	中3-3 成田竜之介			高3-3 菱山紀武		
	ゴルフ部	0	2	8	10	2	5	10	17	27	(中高一緒に活動)			高3-1 阿出川宗哉	高3-1 松崎航大	
	サッカー部	14	16	12	42	10	13	9	32	74	中3-4 岸本 耀	中3-3 山本悠太	中3-4 吉田悠人	高3-1 山口 隼	高3-3 藤井悠正 高3-4 山田麻陽	高2-3 塩田歩睦
	山岳スキー部	3	8	1	12	1	7	5	13	25	中3-3 竹田柊晴			高3-1 本田英希	高3-1 野間康太郎	高3-1 小野 俊
	水泳部	14	8	9	31	4	15	7	26	57	中3-2 中村康弘	中3-4 榎木真大	中3-3 中村太凱	高3-3 藤原琢実	高3-1 田野倉悠正	高3-1 高橋佳新
	卓球部	6	6	17	29	9	12	6	27	56	中3-3 瀬尾真斗	中3-2 木村快渡	中3-3 西田蒼空	高3-2 山田英楠	高3-4 鈴木 悟	高2-2 白井 仁 高2-2 中里終平
	庭球部	9	14	18	41	18	14	10	42	83	中3-1 鈴木陽大	中3-1 荻野幹太郎	中3-1 目黒史温	高3-3 植松希大	高3-2 八尋椋平	高3-4 佐藤天飛 高3-1 高坂裕貴
	バスケットボール部	23	16	25	64	17	13	3	33	97	中3-2 永嶺 想 中3-3 盛武泰年	中3-3 神下 剛	中3-1 森勇太郎 中3-4 中野瑛太	高3-2 荒井琉士	高3-2 池田裕太	高2-1 金子献世 高2-2 川本晃大
	野球部	12	13	12	37	7	19	18	44	81	中3-4 太田寿人	中3-1 工藤佑斗		高3-1 中山陽寧	高3-1 増田純大	
	陸上競技部	4	15	9	28	16	1	4	21	49	中3-3 近藤泰知	中3-1 見城裕隆	中3-1 石川祥多	高3-1 上野重貴斗	高3-2 樋貝遼誠	高3-1 上野翔太郎
	釣り同好会	12	7	1	20	7	4	0	11	31	(中高一緒に活動)			高2-2 赤松 優	高2-2 黒田英士朗	高2-3 原田齋紀
	合計(B)	101	109	113	323	92	104	74	270	593						
	総計	165	171	157	493	155	162	138	455	948						

※兼部の生徒も含まれます。なお、三役の呼称は、部・会により異なります。

## 十 今月の聖句

“Nation shall not take up sword against nation, nor shall they learn war anymore.”

Isaiah 2:4

Once again, the world is faced with war. Indeed, even though we have seen relatively peaceful days in the recent past, war has been constant in countries such as the Philippines, Ethiopia, or Columbia. These are not "open" wars, but rather they have been "skirmishes" that never seem to end. But with the invasion of the Ukraine by Russia, "open" war is now in the news. What are we to think of this?

War is an almost constant theme in the Old Testament. In those days, any war was considered a Holy War, a conflict that God started and led (For Moses said, because the Lord promised he would have war with Amalek from generation to generation. Exodus (出エジプト記) 17:16). Everything about those wars had a strong religious meaning. Before and during battles, there were special prayer services, or sacrifices, that were performed in order to get God's continued support: See I Samuel (サムエル記上) 7:8-10. The Hebrews often brought their most sacred thing with them, the Ark of the Covenant, onto the battlefield. This Ark was a huge wooden box with special carvings and gold inlays. Inside the Ark was the Covenant, the Ten Commandments, carved in stone and given, personally by God to Moses on the top of Mount Sinai. It symbolized the presence of God and meant the Hebrews could not be defeated. But when the Ark was suddenly captured by the Philistines, the power of the Ark, as well as the meaning of continuous war came into question. This doesn't mean

that war was suddenly over, for scenes and images of battle continue throughout the rest of the Old Testament. What evolved was a change of thought. God's presence and support and even promotion of war came to be seen differently. Prophets would seek not victory on the battlefield. Instead, they began to see that the terror and destruction, the disruption and great sadness was God's judgment against His people for their many sins. In other words, if people would have behaved properly, had worshiped God, and kept His commandments, then war would not come. The glory of war and the desire for victory on the battlefield began to fade. Therefore, we can see God's unusual change of heart in Jeremiah (エレミヤ書) 21:3-7. No longer ready for battle, God tells the people of Israel that he will remove the weapons they have. Then he will begin to fight against his own people "in fury and great wrath" and will have no mercy against them. He will make sure that the enemy completely captures them. This may very well be an explanation, after the fact, of why the people of Israel were defeated, but it also shows a big change in what people thought about war and God's role in war. Somehow, it was the people themselves who were responsible for the war and for the defeat. It was their duty to reflect upon their own behavior, their own thoughts, and their relationship with God. Eventually, the people of Israel began to look forward to the day when the endless cycle of war, destruction, hatred, and enmity would be broken. Their new feelings would be told by the

prophet Isaiah, words that now are written on the wall facing the United Nations Building in New York City:

The law will go out from Zion, the word of the LORD from Jerusalem. He will judge between the nations and will settle disputes for many peoples. They shall beat their swords into plowshares and their spears into pruning hooks. Nation shall not take up sword against nation, nor shall they learn war anymore. Isaiah (イザヤ書) 2:3-4

Let us pray for Ukraine, that the world will help this Old Testament prophecy come true, even after almost 3,000 years. Chaplain Mark Stahl



### 中学一年便り

#### 前期を終えて

四月に入学してから怒涛のオンラインシオン期間を経て、右も左もあまりよく分らないまま清里キャンプへ行き、気づけば中間テストと総合テストを受け終えて夏休みに入ろうとしている。皆さんにとってはまさに「あつという間」の前期だったのではないだろうか。緊張感に包まれていた四月と比べ、今は皆が学校生活に慣れてとつてもリラックスして毎日を過ごしている様子が見られていきます。友達や先生とのかかわり方、各教科の勉強の仕方、部活での振る舞い方など、色々と慣れたことで物事もスムーズに進められるようになってきたのではないのでしょうか。一時期はその「慣れ」が悪い方向に影響を与えてしまっていることもあったものの、総合テストまでの数週間で落ち着きを取り戻し、

### 高校一年便り

#### まっさら

最近、初代ポケモンのゲームで遊んでいます。最初の町の名はマサラタウン。小さな町の看板には、こう書かれています。「マサラはまっさら、はじまりのいろ。」  
やがて色の名を冠した町をいくつも巡る少年は、「まっさら」な町から自立し旅立っていく。印象的でした。幼かった当時は何も思いませんでしたが……。話は変わりますが、五月のキャリア学習は、いかがでしたか。「なんか忙しかったなあ」程度のぼやけた記憶になっていません。  
キャリアは職歴と同一視されがちですが、必ずしも仕事の話と直結している必要はありません。結局のところ、今回の職種について学んだ人であつても、究極的に考えるべきは自分の「生き方」です。職業という選択は、その幹から伸びる枝のひとつにすぎません。

### 中学二年便り

#### Deliver us from the evil

何年前かから、卒業生・OBの方々から「立教池袋は変わってしまったのか？」という声を聞く。真摯に受け止めたい。立教がキリスト教学校というのは言うまでもない。語呂合わせだが、キリスト（切り捨て）の学校ではない。立教大学広報課の表現を引用すれば「立教は『自由の学府』と称され、現象にとらわれず、常にその本質に迫ろうとする自由の精神で、個性を重視した人間教育を行なっている」とある。「目が手に向かって『お前は知らない』とは言えない。」（コリント一・12章）  
カリキュラムは、(1)理念(2)教授法(3)授業展開という流れで成り立っている。学校とは、理念（建学の精神）を具現化する場所である。授業第一であり、レジャーランドではない。立教で、画一主義・悪平等を押し付

### 高校二年便り

#### 社会を変えるには

黒板の前に空の段ボールを置く。自分の席から丸めた紙を投げる。前の席からは難なく入るが、最後列からはなかなか入らない。先日中学の選科「私たちがとジェンダー」で行ったワークである。（ワーク・本稿ともに太田啓子「これからの男の子たちへ」参考）  
黒板から席までの距離は何を表すのか。教室内を社会だとするならば、前に座っている人は、シズジェンダー（出生時に決められた性別と性自認が一致する人）でヘテロセクシャル（異性愛者）の男性、もしくは生まれながら経済的に恵まれている人である。後ろに行くにつれ、そうではない環境や境遇にある人と言える。前に座る人は振り返らない限り、差別的なその構造に気付くことはない。「差別なんてない」「自分には関係ない」と言える人は「特

### 中学三年便り

#### リストアート

「おどろきな夏」という短編の映画がある。舞台は岐阜の郡上八幡、水と踊りの小さな町。毎夏三十一夜に渡つて郡上踊りが行われることで有名、とくに八月十三日・十六日は「徹夜踊」といつて夜の八時から明け方の五時までノンストップで踊り続ける。これを目当てに全国から集まる五万ほどの踊り助平（郡上では踊り好きのことを踊り助平という）が、一夜の踊りをつくりあげる。  
江戸時代から続く郡上踊り一度も途切れることがなかった。一九四五年八月十五日ですら郡上踊りは行われた（実施記録や写真が残っているのは日本全国で郡上踊りだけである）。その郡上踊りの輪がここ二年間はなくなってしまった。  
踊りがあつて当たり前の郡上八幡、そこにくらす人々を描いているのが前出の映画だ。ボク自身、昨年一昨年も足を運んでいるが、静まりかえった郡上八幡は違う町な

### 高校三年便り

#### 自由な夏休み

夏至も過ぎ、地球公転軌道の半分、暑さもピークを迎えます。夏至は一年で一番夜が短い時期です。こんなときにこそ見られるものといえば人工衛星です。ようやく暗くなった空を見上げれば、衛星軌道上空の日射時間が長いので、動く恒星のように人工衛星が見られます。もちろん夜明け前の空でも同じように見ることが出来ます。  
恒星と同じような光点が静かに動いていくのはロケット時代以前にはありえない現象である。ことを思うと不思議な感覚がいつそう増します。特にかわりばえのない夏かもしれません。が、みる人によつては宇宙時代を感じ取れる夏にもなるわけです。  
今は南の空に土星が観望の好機を迎えています。さらには海王星が見ごろとなります。望遠

んじやないかとさえ思えた。でも、今年はずいぶん。重要無形文化財に指定されている伝統ある踊りが再開される。「何としても踊りを」という熱意がさまざまな工夫を生み出し、実施の目途が立った。ボクたちの学校でもこの二年間、さまざまな行事が変更されたり中止になったりした。だから現在の2・3は、いつもの学校行事を体験していない。これらをリストアップさせるのが今年の立教生。その中でも中3は、さまざまな場面で中学生の先頭に立ち後輩を引っ張ることが期待されている。

今、R.I.F.の中学企画の準備が進められている。中学企画には立教池袋の中学生がその企画力・自治力を発揮させる場」という意味合いがある。「中学企画なきR.I.F.」が二年間続いたが、なんとこれも今年も成功させた。実行委員はもちろん他の中3も協力してよい企画を作り上げよう。この中3のメンバーなら絶対にできると信じている。  
(荻野朝行)

鏡を使えば、不思議なリングであつたり水惑星とよばれる青い姿が確認できます。  
天の川銀河中心のブラックホール画像が公開されました。百聞は一見に如かずといいますが、これは解説をみないとまいち意味不明なものに感じます。やはり本当の知識をもっていないければ理解度がずいぶん違うんだと思うのです。  
自由選択の授業で、ずいぶんと新しい世界の知識を獲得したと思えます。トロヤや群小惑星なんて地学概論をとつた人しか知らないが知的興奮は大いなるものがあるはず。コロナ禍の影響もずいぶん以前の状況に回復してきました。受験のない多くの高3年生は、この貴重な自由夏休みを大いに活用しましょう。  
(宇津木千秋)